■現在、国語力が低下してゐる

「21世紀の世界は、日本が最も活躍する世紀になるであらう」とは、“水平思考”で一世を風靡したイギリス剣橋（ケンブリッジ）大学教授デボノ博士の予言ですが、その根拠は「イギリスではせいぜい百の単位でしか読まれない学術専門書が、日本では千、乃至、万の単位で読まれてゐる」といふ事に在りました。一国の興廃は、国民の多くが学問を尊重してゐるか否かに関ってゐますが、それは学術専門書の読まれる量の多寡に現れる、と考へられるからです。

然し、この状況は今も変りが無いでせうか。私は甚だ疑問に思ひます。読書力の基礎は漢字に在りますが、その力が年ごとに低下してゐるからです。その原因の第１は、前の章でも述べましたやうに、敗戦の原因が繁雑な漢字の使用に在ったとしてその廃絶を図った為に漢字教育が甚しく軽んぜられ、その教育を受けて育った今の教師たちには漢字を教育する力が無い、といふ事に在ります。

その上にもう１つ、国語の学習時間が外の国に較べて極端に少ない事が挙げられます。世界のいづれの国でも、小学校の前半の３年間の学科は国語と算数に限られてゐて、中でも国語の時間が特に多く、全体の半分以上を占めてゐる、といふのに、我が国だけが全体の４分の１の時間で済ませてゐるのです。前に述べましたやうに、ドイツでは１週間の学習時間、24時間のうち国語の時間が14時間もあるのに、我が国では僅かに６時間しか無いのです。

ドイツではこのやうにして３年間に国語力を十分に伸ばし、その力を４年生以降の他の学科の学習に活用します。ドイツでは４年生になって初めて理科がありますが、その時間は僅かに２時間です。我が国では戦後から平成３年度までずっと１年生から理科が２時間もあり、３年生、４年生では３時間もありました。然し、時間ばかり多くあっても国語力が未熟では、理科の学習は決して深まらないでせう。幸ひ、平成４年度から理科や社会科は３年生以降に改められましたが、その替り“生活科”といふ新しい学科が増え、国語の時間はちょっぴり増えただけです。

どこの国でもしてゐますやうに、我が国でも初めの３年間の学習は国語と算数だけに絞るべきです。その方が結局他の学科の学習にも有効なのです。我が国でも戦前は４年生で初めて理科をやり、５年生で地理や歴史をやりました。それが良いのです。一日も早く元に戻す事が必要です。